

書評

脊椎脊髓ハンドブック 第2版

徳橋泰明 ● 監修 日本大学医学部整形外科学系整形外科学分野脊椎班 ● 著

〔評者〕松崎浩巳(日本大学総合科学研究所教授)

『脊椎脊髓ハンドブック 第2版』についての書評を依頼された。かつて私が脊椎班の責任者でいた時、後輩の徳橋泰明医師(現在日本大学医学部整形外科主任教授)が主編者となって第1版を編集したものである。今回この10年前に発行された第1版を改訂したものである。後輩の書であるから遠慮なく好き勝手に書評を述べたいとの思いから改めてじっくり拝読させてもらった。

この手のハンドブックは白衣のポケットに収まり、かつ読者が要求している内容(項目)をいかに多く要領よくまとめられているかがポイントとなる。対象が整形外科医、脳神経外科医、神経内科医など多岐にわたるため、思ったよりも幅広い内容が網羅されている。知りたい内容が面白いほど選択されていて、この点、主編者の徳橋医師の抜群の臨床的嗅覚が感じ取れる。

内容は、第1章が「脊椎脊髓疾患への神経学的アプローチ」と第2章が「各疾患別診断のポイント」に分類されている。著者の強調する普遍的な神経学徴候からみた高位診断と横位診断の基本について

抜けがないほど十分に記載されている。続いて臨床にきわめて重要な脊髓高位からみた症候を大後頭孔から頸髄、胸髄、脊髓円錐部、馬尾へと部位別に要領よくまとめられ、心身医学的な項目にも触れられている。これら神経学的アプローチの記載は、多くの図に溢れて説明されているので難解ではなく理解しやすい。神経症候学の知識の整理にはもってこいの書である。

第2章の各疾患別診断のポイントはAが頸椎部疾患、Bが胸椎部疾患、Cが腰椎部疾患、Dが先天性疾患、Eが腫瘍性疾患、Fが骨粗鬆症や脊柱変形など、Gが脊髓空洞症などの脊髓疾患に分類されて述べられている。改訂により新しい項目が随所にみられ、例えば頸椎症では日整会の新評価であるJOACMEQが網羅されているし、臨床上鑑別診断のポイントである頸髄症と筋萎縮性側索硬化症などツボが押さえられている。また、この10年間で進歩したMRIの画像診断のポイントが追加されていて、改訂版の意義が示されている。難点を言えば、図と文章が所狭しと詰め込まれているので、私



のような視力の衰えた者にとってはやや見づらい。しかし、ハンドブックの性質上狭い紙面で多くの内容を記載しなければならないので致し方ないことであろう。

読後、なるほどロングセラーになるだけの書であると納得させられた。コンパクトなりに内容の充実したハンドブック『脊椎脊髓ハンドブック 第2版』を手軽に臨床の現場で使われることを、特に若手の皆様にお勧めいたします。

A5変型 頁262 2010年
定価4,830円(本体4,600円+税5%)

三輪書店 刊